

会 議 記 録

高松市附属機関等の設置、運営に関する要綱の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	第 5 回高松市創造都市推進懇談会（U 4 0 / 第 5 期）
開催日時	令和 3 年 1 2 月 1 3 日(月) 1 8 時～1 9 時 3 0 分
開催場所	高松市役所 3 階 3 2 会議室
議 題	「高松らしさ」の源泉となる歴史・文化を学ぶ」
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	中村かおり委員、二川委員、穴吹委員、大石委員、三木委員、棟近委員、若林委員、大崎委員、中村香菜子委員、西森委員、林委員、松井委員、宮武委員、湯川委員
市職員 U 4 0	佐々木、上原、四宮、齊藤、三好、平岡、香西、藪下
講師	香川大学経済学部西成教授
事務局	三浦係長、岡本主査
傍聴者	なし（定員：5人）
担当課及び 連絡先	産業振興課 創造産業係 8 3 9 - 2 4 1 1

審議経過及び審議結果

1 開会

（事務局から開会挨拶）

【会長】

前回会議から期間が空いたので、これまでの振り返りをしたいと思います。

第 1 回は、政策課の市職員から、2040 年問題などを念頭に、高松市では、人口減少を止めるってということ、減少しているものに対応していくこと、この 2 つのアプローチで対策をやっているというお話をしていただいて、その中で、U40 として何ができるかということを考え始めようというスタートでした。

第 2 回は、「高松らしさ」を考えようということで、まず、副会長から、地域のアイデンティティを大切にして施策を考えてきた街の事例をご紹介していただいて、ワールドカフェ形式で、高松らしさや住みたくなる街という

審議経過及び審議結果

ところを考えました。

第3回では、高松のキャッチコピーを作ろうということで、村上モリローさんに来ていただきまして、「伝える」と「伝わる」の違いを学びながら、身近な小さな悩みからキャッチコピーを考えました。

第4回では、キャッチコピーを作る前に、各自でお題を決めましょうということで、「高松×○○」という宿題を提出していただいて、会議当日にブラッシュアップしました。

ここまでおさらいしましたが、今回の第5回は、順番的には、作成したキャッチコピーを発表する会になるのですが、コロナの影響もあって延期になり、また、年末のお忙しい時期だと思いますので、一旦ここで、顔を合わせて、学びを深めて、最終のキャッチコピーの発表会に臨みたいと思います。

本日は、西成先生のお話を聞いて、皆さん、受け取り方は違うとは思いますが、おぼろげながら高松の風景を思い浮かべて、皆さんの高松のイメージを合わせていければいいのではないかと考えています。

次回の第6回では、キャッチコピーの作成を宿題としまして、最低3つ考えてきてもらいます。もちろんお題が変わっても大丈夫です。そのキャッチコピーをブラッシュアップして完成させます。宿題をすることを念頭に、本日の西成先生のお話しを聞いてもらい、皆さんの考え方に反映していただければと思います。

ここで、皆さんに1つお願いがあります。西成先生のお話しを聞く中で、1つ、キーワードとして、印象に残ったものをメモなどしておいてください。お話しが終わった後に、グループワークをして、その印象に残ったものをシェアしていただいて、学びの共有をさせていただければと思っています。

それでは、西成先生、ご講演よろしくお願ひいたします。

【香川大学経済学部 西成 典久教授の講演】

【会長】

西成先生、ありがとうございました。

それでは、グループワークに移ります。

【副会長】

何か質問とかあったら今この段階でと思いますが、いかがですか。

【委員】

海城を生かしたまちづくりって、今日初めて聞いた言葉なので、まだイメージがわからないのですが、例えばどんなことができるのだろうって、ちょっと気になっています。

【西成教授】

まずは、単純に、海辺が今フェリー乗り場になっていて、商業利用がかなり規制されています。だから、例えば、フェリーを降りたら、マルシェが毎日のように開催されるような場所ができていたり、要は海を身近に感じられる、海と共にこの高松の風を感じられるかどうか。

あと、お城が、おそらく、ここ10年以内にはもしかしたら復元される可能性が出てきて、お城が復元されたら、瀬戸大橋開通と同じぐらいのインパクトが出る可能性がある。その時に、歴史や文化を活かした街をもう1回見直そうという動きがかなり出てくると思います。

だから、お城ができたとしたらどうするかというところで、これは行政のところでやらなきゃいけないことだらけで、いろんな規制緩和だったり、道路の規制を取っ払ったりだとか。

だから、今、僕が考えているのは、まずは、その海を生活圏にするっていうところかなと思うのですが。ぜひ、皆さんからもまたアイデアをいただけたら嬉しいかなと思います。

【委員】

ありがとうございます。

【副会長】

ありがとうございます。

他になければ、グループワークに入って、その後、意見や感想を西成先生と共有していきたいと思います。

では、今、西成先生のお話いただいた内容の感想の共有とか、それからキーワードという話があったので、こういうキーワードが気になったとかの共有をしてもらって、そのあと、なぜ迷走するのかというところも、意見交換したいと思って

います。

じゃあ、グループごとに意見交換していきましょう。お願いします。

(グループワーク)

【副会長】

皆さん、ありがとうございます。

それでは、グループごとに、意見などを聞いて回りたいと思います。

【委員（グループ①）】

僕達のところは、結局、商店街とかイオンとかの話をしたのですが、結構、戦略の話ばかりしていて。多分、今の高松市と同じだなんて。戦略の部分を話ししないと多分、前に進まないのではと思ったので、そんな話をもっと今後できればなと思いました。

【委員（グループ②）】

僕は、松山市の出身なのですが、西成先生のお話しの中で、歴史主体で進んでいった松山市と高松市とを比較されたのですが、確かに考えてみたら、歴史で正岡子規だとか、学ぶ機会が向こうは多かった。それがすごく印象に残っているので、その教育の面で高松市とはこういうイメージだというか、基盤となるようなものができたら、また少し変わってくるのかな。

あと、出た意見としては、開発の中に、例えば外部のお金だったり、企業だったりが開発したもので、地元の人には愛着がなかなか持てないというか、住民参加型というか、地域の人々が地域を良くしていくみたいな開発プロジェクトがあれば、もう少し高松らしさというか、そんなのが持てるのではないのでしょうかという話をしておりました。

【委員（グループ③）】

自分たちの班は、県外から観光客が来るときに、車で来られる観光客が多かったら、わざわざ高松を経由する必要がないので、西成先生がおっしゃったような高松城の周りを歩く観光地にしたら、わざわざ車で来なくても高松で完結するのではないかな。

この班は、歴史好きな方とか、海外によく行く方がいたので、歴史を目的地にしてくる方をターゲットにして、例えば、高松城の天守閣ができれば、お酒飲みながら眺めるだけでも、観光としての資源になるのではないかという話になりました。

【委員（グループ④）】

私どもの班では、先生のお話にもありましたように、海・高松駅周辺・港周辺とお城を挟んで、街・瓦町・商店街の距離が遠いというところがネックになっているかなと。往復をしても、結局、無心で歩いたりして、目に留まるようなものがない。その流れで中央通りを選んでしまって歩いてしまったりすると、尚更、生活道だけになっちゃって立ち寄りところもないという。そういうところも何とかしていかないといけないのかなとかですね。結局、インフラ関係の話になりました。

【委員（グループ⑤）】

僕の班では、「歩いて楽しい」というキーワードが出ていて、東京や県外から友達が来ていたときに、高松の町を歩いていて、山が見えるっていうのが特徴的だなとか、意外と歩いているっていうところが結構価値があるのかなっていう話が出ていました。

あとは、金子知事の時代に、芸術面・工芸面っていうのが盛り上がっていたけれども、なぜそれで終わってしまったのか、しぼんだ理由がとても気になるという話も出ました。そこから、瀬戸内国際芸術祭に何か繋がっているのかなという話が出たりしました。高松らしさを考えれば考えるほど、言葉にできないなっていうところで終わりました。以上です。

【西成教授】

最後に、工芸学校のお話しをしますと、まず創造都市に関して、大西市長が創造都市政策を進めるということで、海外で論じられている「クリエイティブシティ」を高松でもやるために、高松市創造都市推進審議会を立ち上げて、創造都市政策研究の第一人者である佐々木雅幸先生に会長になっていただいて、今でも会長をやっていただいています。その中で、ユネスコが創造都市ネットワークを作っていて、日本では金沢だったり、浜松だったり、札幌だったり、要は、世界の創造都市政策のネットワークの中に日本の都市が入っていくようになっていて、3、4年前に高松も入るべきじゃないかという議論があったときに、7つの分野

から選んで入る必要があった。その時、審議会の方でも、仮に入るとしたらどの分野で入るかっていうことで議論がかなり割れました。高松は食もあるけど、工芸があると。

では、なぜ高松で工芸が議論されるかというお話させてもらおうと、例えば、日本を代表する輪島塗がありますが、もともと松平藩の時に、高松の漆芸は技術が高いものとして、高松の職人が輪島の職人に教えにっていたというお話もあります。

それぐらい漆芸に関しては秀でるものがあったって、香川県の機関として、漆芸の専門家を育てる漆芸研究所があり、日本でも独自の地位があります。しかし、PRの仕方でおそらく負けていて、漆器は金沢にほとんどもっていかれている。ある意味、もったいない状況が続いている。

それで漆芸を中心とした伝統工芸を香川県が成熟させていく訳ですが、近代教育の過程の中で、今の香川大学教育学部北キャンパスに位置する場所に、昔、工芸学校があって、戦後の改革の際に、師範学校や商業学校は大学に昇格しましたが、工芸学校は大学にはならず、高松工芸高校になりました。その後、香川県だけでなく、日本全国で言えることですが、専門高校の地位が戦後の偏差値教育の中でどんどん低下してしまっただが故に、そういった工芸高校を市や県としてどう捉えるかという議論が必要なのですが、つまり、大学に昇格されなかったが故に、日本全国から人材、教授陣も含めて、根付くチャンスを逃してしまった。

ただ、金子知事以降、県立の工芸大学を作る構想が浮上して無くなるという経緯もあって、地域の中で工芸大学を作るという教育研究の重要な文化のネタが、まだ、脈々と工芸高校で引き継がれているという風に考えてもいいのかなと。

そういったバックボーンを次に活かして欲しいなというふうに思います。

【副会長】

西成先生ありがとうございます。

(拍手)

【会長】

西成先生ありがとうございました。

ちょうどですね、今日が折り返しです。2年間の全10回で、今日は5回目の節目のタイミングです。今までは、個人のワークをして、高松とは？とかキャッチコピーで自分の思い描く高松とか、目指したい高松とかを表現していくことに

時間を費やしてきました。

後半は、いよいよ皆さんのお力をお借りして、会議室の外の人たちを巻き込んでいく動きにしていきたいなと思っています。具体的には、また順を追ってご報告をしていきたいなと思っていますが、今日、西成先生にお話いただいたことも消化しつつ、次回はキャッチコピー作りをして、これまでの活動が全て繋がっていると認識してもらって、これから皆さんの力をしっかりお借りして、いい活動にしていけたらなと思います。

これで、第5回目は以上となります。

3 閉会

(事務局から事務連絡をして閉会)